

〔翻刻〕徒然草大意読方秘伝抄：元禄の古典講釈マ ニュアル

川平，敏文
熊本県立大学

<https://doi.org/10.15017/8967>

出版情報：文献探究. 42, pp.51-63, 2004-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

〔翻刻〕徒然草大意読方秘伝抄 ―元禄の古典講釈マニユアル―

川 平 敏 文

緒言

徒然草が藤原惺窩、林羅山、松永貞徳ら幕初の思潮を先導した人々、およびその聲咳に接した者たちの注目する所となり、江戸前期の文芸・学芸史の中に特筆すべき流行現象を巻き起こした事はよく知られている。本書は仏教を軸とした三教の哲理（思想）と、和歌を軸とした詩的な情意（文芸）とを同時に摂取できる和書として、当時いちじるしくその底辺を広げつつあった、新しい読書人たちの渴を医したのである。現在も大量に伝存する当時の徒然草本文、注釈書の類はその実態をよく物語っているが、いまそれらを眺めわたして、「此段、能々心を着て熟読すべし」「殊に殊勝の段なり」（『諸抄大成』第一四二段）などといった口吻に接すると、本書に心底惚れ込んで、これを得々として講じた人々の姿が想像されてくる。少なくとも注釈書を著して己れの「読み」を世に問うたほどの先生ならば、必ずやその講釈の経験を持っていたに違いない。

しかし徒然草を講釈したのは、無論そのような注釈書を遺した人々ばかりではない。例えば全国俳諧行脚の途上、土地の者に望まれるまに講釈した大淀三千風（『日本行脚文集』）、島原侯松平忠房にその

徒然草講釈の面白さが買われて仕官の口を得た伊藤栄治（『島原藩日記』）、芭蕉にわざわざ「つれづれよみたる狂隠者」（尚白苑・元禄元年十二月五日付書簡）と紹介された路通、降っては談義本に活写される徒然草講釈の様子（『当世下手談義』『新斎夜語』）などを見ていると、この書を「持ちネタ」として自在に講釈する上手もあつたようである。そしてそのような上手の中には、これを一つの「技芸」として伝えようとする者さえもいた。それがここに紹介する『徒然草大意読方秘伝抄』（写本一冊、元禄十五年奥書、京都大学文学部蔵）である。

本書には、徒然草講釈をする場合にどのような点に気をつけるべきかの条々が記される。それは例えば、講師としての心構え、本文の朗読法、敬語の使い分け、先人の説の捌き方などといった極めて実際的な注意であり、当時の古典講釈のあり方を窺う上での貴重な情報に富む。またこれ以後、小説史の上では談義本が隆盛する事となるが、本書はその言説空間や表現手法を考える上でも有用な資料となり得るのではないかと考える。

なお本資料の意義については、平成十五年度日本近世文学会春季大会において既に報告し、またそれを近々別稿に纏める予定であるので、詳しくはそちらを御参照願いたい。

書誌

○請求番号 国文学／LKⅡ／17。

○書型 二七・二種×一八・三種。

○巻冊 一卷一冊。

○題簽 「徒然草大意讀方秘傳抄 全」(左肩、単枠)。

○丁数 二八丁。遊紙なし。

○行数 半葉一〇行。

○備考 後補覆表紙あり。

凡例

一、各条の頭に算用数字を付して条番号とした。

一、旧漢字を新漢字に改めたほか、句読点・濁点等を補った。

一、誤字・宛字の類はそのまま翻字し、右脇に()として現在通行の文字を記した。

一、右以外の誤りは、右脇に(ママ)と記した。

一、難訓と思われる漢字には、右脇に()として私の読みを示した。

一、どうしても判読できない文字には右脇に?を附した。

一、本文中、徒然草の本文が引用され、右肩に朱書きで章段番号が書かれる事がある。それらはしばしば現行の章段番号と齟齬するが、本稿ではこれをすべて現行の章段番号に改め、()で記した。また、引用された徒然草の本文は「」で括った。

翻字

徒然草大意讀方秘傳抄

随世軒一器子 書

斎藤氏唱水

1 一、つれづれ一部の心得様、あまた有。此定る所、秘書にてはあらねど、こゝろざしなき人には大智広学の人なりとも見すべからず。一部をも修行し、身の為、心の徳と深く信有人の為にみちびく物也。

2 一、徒然は大事の草紙なり。能々講尺する人を吟味すべし。つれづれはよまずして、自分の見を立て、却て兼好の本意を取失ふ類有べし。又、聞人もおぼろげに心得なば、聞ぬには劣る類ひ有なれば、一段にても信をとりて見るべし。つれづれを世もつて翫ぶ本意、大方ならず。其故は、天竺に仏出生ましくて、梵語を以て諸経を明し、迷ひを照し給ふ。大唐には三皇五帝より外典を以て世を治む。中にも孔子の道を儒とし、老子の道を道として二流有。我朝に天神七代より以来、神道を以て天下を治る。釈迦の道悪き事ならば、もろこしのかしこき世々の帝をはじめ、あまねき智者何として是をもてなさんや。我朝にも、神国なれば外の事はいらぬ物成とはいわれず。是又、天子・関白・公方の歴々、其外の智者あげて員へがたし。何とて儒釈道の三教ともに日本には行れけるぞ。然る上は、儒釈神道ともに何れ勝劣分ちがたし。中に浅

き深の差はありとも、皆世を治、身を修、心を治る道は替らず。世の人、偏屈なる心なれば、おのれが思ひよる道より外はあしき連、却てそしりあへる。古人の歴々を心ひとつにてそしるに成ぬ。つれづれを学ん人、つゝしみて偏屈成べからず。されば儒書を学ぶ時は儒に落つ。仏学をなす人は夫になずむ。兼好の本意を尋ね見るに、既につれづれ草にてしられたり。我朝は神国の類ひなき上に、儒釈道の三教ともに世に行れ、何れを捨んや。神道を学んには日本記にてもうかゞわねばならず、儒なれば四書五経等、道なれば老子莊子、仏法なれば教者禪家の品ことなれば、学びよる事、学文の少くもなし。智恵の賢きならねば入事難くして、徒に愚癡界に落て命を果す事、なげかしき哉也。爰におみて、和国の風にならつて仮名文字つらね、いろはを知らぬ程の愚者は希なれば、誰も見やすし。儒釈神道、何れ勝劣を定めねば、誰も嫌ふと云事なし。世の諺をあまねく書たれば、愚成はたとへにて入、賢は理りより入、若きは幽玄より入、老たるは静なるより入、儒は理りより入、仏を好むは仏道より入。此草紙の如く周く沙汰し、言葉うるはしく見よきはなし。さるによりて、藍より出て藍よりも深く、儒仏神道の肝要なり。然る上は此草紙を読ん人、又聞人も、この心持を以入るべし。

3 一、徒然を大意を以分るに、凡六ツ七ツなり。儒道、道教、神道、仏道、因縁、有職、幽玄なるべし。其品々交なれども、中にも大意をしるは、「古の聖の御代」、「心なしと見ゆる者」など、有段は、儒なり。「名利」の段、「物にあらそはず」など、有段は道也。

「齋宮野々宮」、「まがり」の段などは、神道なり。「寸陰おしむ人なし」、「望月のまどか」など、ある段は、因縁也。「岡本の関白殿」、「定額の女儒」など、有段は、有職なり。「荒たる宿の人めなき」、「花は盛り」など、有は、幽玄なり。此心持にて知るべし。

4 一、つれづれを読ん人、仏道を能すまざずして講ずる事かたし。其故は、兼好は何れも道は捨ぬ人なれ共、大綱は仏法者なればなり。既に下部の家から出家なり、儒は立ながら遁世者なり。又、一部を見るに、始の「いでや此世に」といふより、終の「空よりや降けん、土よりやわきけん」といふ迄、皆仏法なり。仏道を元としてよまざば、とゞこほる事ありなん。

5 一、儒を能学び、神道を窺ひ、道を濟し、職源の有職を学び、博く因縁等を尋ね、殊には歌道にくらくしては難叶。扱は世上の機につけ、よろこびにつけ、たづさはらずして其味ひ知がたし。何事につけても皆一部の修行と思ひて、世の事業をならふが専一なり。

6 一、仏学をなさんには、天台学がよろしからん。在世の作法、五時八教の判断ならでは分ちがたし。四教義の大綱をよく弁ふべし。扱は真言家の三蜜といふ心地を心得ずんばは至りがたかるべし。

7 一、禅家の工夫なく、見姓の心地、教外別伝の無意味と云を心得ざる人、一部を自由に取廻す事、難かるべし。つれづれは台家の学計にて禅家の事なしと云人有。一部始終は皆禅法なり。是は禅の味ひをしらぬ人は、兼好を疑ふべし。禅といふはこの沙汰なり。禅宗と名の付たるも、うるさくおもふ程の事也。能々味ふべし。

8一、台家の観、止観を専一と学ぶべし。題号を始め一部止観の大意也。俗人及びがたしは、止観の知識に大綱なり共うけがふべし。

9一、四書一部心得ざる人は、いかゞ也。たとひ素読なり共せざらんは、耳遠き事有なん。そよみをもしらざらんは、評ずるにたらず。是は聞人の方へ申上る也。

10一、一部の大綱は、仏道なり。縦、世上の諺にして儒の事出ずとも、仏道外はみな儒道なりと心得べし。内に神道道教あるべし。是は各別の事なり。

11一、然る時、儒、釈、道、神道、因縁、有職、幽玄、其色々を書顯あらはされし上は、読ん人、何の道をも心得て読べし。但し読により様あり。

儒の所を専要と書れし所をば、儒を成程本意と大事に、儒者と我身をおもひてよむべし。仏法を大事とかゝれし所は、仏者と成て読べし。所々段々其本意の如く読分るが専也。かよふの心得をしらぬ人、儒者は仏法の所をも儒に読なし、本意の外の事あれば兼好をそしりあへり。仏者の見は儒をも仏道にし、又歌学を得たる人は一部をみな歌を以てさばき、有職の方は何事も皆因縁秘事とて埒を明ず。物を広く知たる人は故事来歴にて日を暮し、又はおほくの註釈を取散らし、分際多し。是皆、我得たる一物に着し、一見におとして兼好をとやかくと評判したる分也。いかにしてつれぐの本意も顯れ、道のたすけともならん。夫はつれぐをよむにはあらで、そしりたるになれり。我胸に一物も無、只つれぐ草の正理を明さんと、つれぐを手本として其心を学ぶべし。是が面白し、かれは此つぎなりなどゝて一部を評論し、翫ぶ物に

なすべからず。

12一、幽玄と有職と交りたるに深き心あり。いかに能道なればとて、儒と斗にても仏斗にても其一色の能道を至極とおもひて心かたき人には、何ともすゝむべきやはらぎの道なし。其如きの人に対し、「あれたる宿の人めなき」とも、「北(一〇四)の屋影に消残りたる雪(一〇五)」

とも、やはらぐる為に幽玄を立たり。「玉のさかづきの底なき」とあるにて心得べし。物はやはらぎ過たるは、あしき事なれど、又やはらぎたる所のなき人は、道に泥みてくらき方有べし。扱、有職を交るたるもおもしろし。上つ方の御もてなし、又実のある草紙とは、禁裏の御沙汰、公事の様子ならでは、とりよりすくなき故なり。去によりてこそ、此草紙自余に替りて類ひなきは、或は儒釈道の誠の道をのべ、あるひは有職、幽玄のやさしきを云、又は世の事業下々の仕業までもうるはしく書れしにより、花実相応の草紙とは此つれぐに限れる也。一部の有増の如くに学ん人、心持を持べき也。一部は心法の品、一念三千諸法実相也。何をか捨る事あらん。

13一、是を読ん人も聞人も、大事の心得様あまた有。ひとつには道念不忘とて、道念をつかの間も忘るゝ事勿れ。ふたつには死と云事をつねに習ふべし。三つには一切の悪事を戯にもなす事なかれ。四つには三力をかり、五つには友を撰ぶべし。

14一、つれぐに限らざる事なかれ。先一段にても其事一色とはおもふべからず。一色の道理をよくすまし、其一理をあまねく諸法に返すべし。縦ば「げこならぬ社」と有は、酒のむ事につけて諸道

の過不及なき様にとのいましめぞと心を附るたぐひなり。

15 一、一部の内、何れおるか成はなけれ共、中にもむつかしくすみに
くき段、「四季」の大意、「土おほね」、「六根淨」、「いもくひ坊
主」、「我身のやん事なからん」、「府生殿の御馬」、「東大寺の
神輿」などの類なり。心を附べし。

16 一、一部の肝要の所は、初段、「不幸に愁」の段、「同じ心ならん」、
「名利」の段、「蟻のごとく」、「つれづれわぶる」、「その物に
附て、その物をついやし」、「一言芳談」、「寸陰おしむ人なし」、
「明日は遠き国」、「物にあらそはず」、「かしこげなる人も」、
「花はさかり」、「心なしと見ゆる者」、「筆をとれば」、「ある
ものゝ子を法師」、「万の事は頼むべからず」、「主ある家」、自讚
の段、「望月のまどか」、「とこしなへ」、終の段也。能々、力を
入て見るべし。

17 一、一物も胸にとゞめずして、はらりと放下して、微塵などもなき
無着の上に、抑揚褒貶とて四の法を以てよむべし。是は爰はよし、
是はあしゝとて、ほめつそしりつする事をおさへつあげつしてさ
ばかねばならぬ事なり。其如くして一物もそれに貪着せねば、な
づみとゞこほる事無なり。

18 一、一部の専要は、時といふ字、一字也。「秋の月は限りなく」と
有段にて可心得。今、日本の風は神道を本として儒釈道、并にお
なはる。其中にとりても、此兼好の時分は乱世にて、公家・武家・
僧俗ともに騒敷、わづかの欲を以て一生を誤る事を悲み、つれ
づれと云類なる道理を題にあらはして、三教の本意をしらせしめ

ん為也。去に依て、さわがしきに対し、閑居隱遁の道、多くのべ
給ふ。是を今の世にさばきては、あたらず。其故は、世は太平に
して干戈治り、おのづから今の世は、つれづれなり。夫に遁世を
すゝめん事、時に違り。去るに依て、つれづれを讀る身のそこね
たる人多し。是、此時を見そこなふ故也。今の世に遁世する事か
たし。先天下の法度として、親族の請合なくして頭をそらず。請
なくして一夜の宿をさへかさねば、さながら道路に餓もならねば、
おのづから親類旦那をへつらひて渡る分なり。あしく聞ては妻子
老親に浮めを見せ、眷属を路頭に立る事、遁世の失也。又、兼好
の時分までも機根は強かるべし。今末世、何者か上代の樹下一宿、
日中一食の作法なるべしなり。此つれづれの失は、遁世をすゝめ
られたる所のみ、よむ者もあぐみ、聞者もまよひぬべし。爰にお
みひて、読ん人、道心をば道念ととりなし、急々にすゝめられた
る所をば、死する事にとりなしてよむべし。夫、仏法には出家遁
世せねば仏にならぬと云事あるまじ。既に四部の弟子のうばそく、
うばいは、俗の事ならずや。其上、大乘には真俗不二とあり。兼
好大乘の行者也。なんぞ遁世のみを本意とし給ん。是、時に応じ
ての方便也。然時は読ん者、又心附べき事也。道念の子細は奥に
明すべし。遁世の所、委しく「不幸」の段を味ふべし。

19 一、物をよむに大事有。悪敷読時は、よまぬにはおとれり。道を聞
に習ひ有。身も心もそこねぬ様にすべし。大方つれづれもよみそ
こなふべし。折角人を導とて、道には入らずして却て道をそこなふ
類ひ、「君子に仁義、僧に法」にてよく心得べし。

20 一、何れの道も浅き深き、広き狭きは有とも、大綱はおなじ。只、

悟と迷との二法をあげて、悟る方を云、迷ふ方をいふべし。つれ
ぐにて云時は、つれぐ草と云題号は悟りの名、一部の品々は
迷のかたなり。一切経八万四千の法問は、八万四千の塵勞門に對
しての事なり。元より仏法にて真如法性、第一義空、阿字本不生、
父母未生以前、本分田地、皆悟の異名也。迷は妄念なり。儒と道
とは、性は本也。儒の悟りは明德、迷ひは私欲也。道の悟りは
無為なり。迷は外智也。神道の悟りは清淨也。迷ひはげがれなり。

真如、明德、無為、清淨、なんの隔ありや。妄念、私欲、外智、
不淨、夫よふになんの分ちありや。道によりて名をあぐる時は替
り、おしなべてあげて見る時は真如・明德・無為・清淨、あはせ
て本心也。本心を悟れとさばき、念の迷ひをしれとおしゆるに何
の差別あらんや。但し此上に一重、何とも手の附ぬ所あり。迷ひ
悟りひとつになりたる所、実相と名附たる分也。儒には無事無貞、
道には自然、神道の不思議、仏法の不可得、兼好も「空よりや降
けん、土よりやわきけん」と工夫にゆづりて云残されし所也。是
は各別の事、唯本心を急度立て夫え何より成とも引入、意こゝろ
のまよひをはらさしめんとの説様專要也。

21 一、世法を能立られし段、初段なり。初段一たんをさへ、身の行と
せんならば、つれぐ学ぶ人也。そこに仏道の因あり。純一実相
とある段は、終の段より立かへりて初段を見ると云に極れり。

22 一、一部のたて所の本意は、「万の事は頼むべからず」とある段に
見へたり。あの段にて工夫純熟せば、おそらくは維磨の方丈の内

の心もしりぬべき段也。

23 一、一部の修行の目付所は、「小鷹によき犬」の段、「ますほのすゝ
き」の段、兩段なり。つれぐ学せん人、此段を絶せず読べき事
なり。書拔てなりともおしへたきなり。

24 一、講尺のならぬ段あり。「狐ふくろう」の段也。何とことわりて
も、柏樹の受みをぬけずは聞うけありがたし。兼好の心法の沙汰
せられたる段は、あの段ばかりと覚ゆる。禅法主人公のせんさく
也。年々工夫を純熟なくば、よむ人、聞人共におぼつかなし。

25 一、一部はみなつれぐの大綱なれども、兼好の不思議は、つれ
ぐと頭されたる所は三つならでは見えず。書出しの詞と、「つ
れぐとわぶる人は」とある段と、終の一段、前に、「さわりなく、
所作なくて、身心ながくしづかなり」と、此三所なり。序正流通
の三段にとりて見れば、「つれぐとわぶる人は」とある段は、つ
れぐの正意也。外に色々のおもしろき段ありとも、つれぐとい
ふ魂、兼好の心法はあの段に限ると心得べし。殊に摩訶止觀に
もありととめられしにて心を附べし。又、終の段、一段前にて兼
好つれぐの大意はとまれりと思ふべし。「身心ながく、しづか
也」ととめられしにて知べし。跡二段は涅槃經律の心也。

26 一、つれぐ草伝受の事、つくぐと考見るに、さのみ事もなし。
源氏三ヶの大事、古今三鳥などの例になぞらえて、「布のもかう」
「しろうるり」、「放免」を三の相伝といへり。又、「大臣大饗」
の段とも相伝と云り。皆以て有職の上の事にて、あまり世の人の
重宝になる事にてはなし。つれぐ草は後柏原院のあたりよりも

てなしたりと云り。只、歌書杯の如くに取なし、上つ方にも御覽ありし。其後あの草紙の中に、因縁にくき事どもを三条殿などの御家にて撰び出し、有職の上にて沙汰せられしを、中頃より世に此草紙をよみ、講釈せしより、有職の方より知ぬ事どもをうかゞひ、相伝して秘する事とはなりたり。何の詮もなき事なり。され共、その道のみだりになすまじきとの為なれば、尤附る儀に伝え秘する事を、猥に沙汰するはあしき事なり。殊には地下人などの上にて、有職の事はしりたり共、少はゞかりあるべきなれば、しらぬと云て置が礼なり。但、「大臣饗」の段は、有職の外にそこに一部の肝要となる事有。是斗は自見にて知べし。読ぬが道なり。其外、「自讚」の段に口伝あり。終の段は勿論なり。又、「揚名介」^(三三九)「呼子鳥」、上に云ごとく、源氏・古今の三の物なれば、弥沙汰する事は憚るべし。

27 一、秘する所あまたあり。儒道、仏道、神道、歌道をよく其源を尋、奥旨を極めて、一部の本意を知りて、人をそこなはず、道に入様にさばくが秘書なり。押定りたる秘事より、おもひの外なる所にとどこほる事有べし。古伝よりし伝る抄どもを見て、不審暗れぬ事ありなん。夫迄につれかくを修行する人なし。おしき事かな。

28 一、たゞく秘事相伝は題号と一部の心得様に有事なり。能々目を附べし。

29 一、不審する事あり。兼好は三教一致の人なれば、親に孝をし、実に忠をなす事どもをこそ肝要とし給ふべきに、仏道に落られたれば社、忠孝を捨し出家の如くに、一部の中に忠孝をのべ給ふ事な

しといふ。是を以ておもふに、弥兼好の本意は深き人なり。つれかくを書んとて、つれかくと有あらはれたる所は始にいふ如く三所より外はなし。又一部は皆心法を沙汰せん為なれど、「主有家」といふより外は見へず。是を以兼好は、つれかくは、本意ならず心法はなき人と云んや。その如く、人間の綱は忠孝五常にしくはなし。されば仁と書て人とよむ。人として仁無は、畜類におなじ。仁の心有者は忠と孝とを弁ざる者あらんや。若その忠と孝となき者は畜類なれば、つれかく草を食にする程聞たりとも、何のたもつ事か可有。されば、品多けれど只一言葉にてことほられたり。「忠孝の勤も医にあらざんば有べからず」と有にて聞へたり。徒然学ぶ人にかぎらず、医道をしりて養生なくば、万法はみな立じ。又、出家は忠孝なしといふも心得られず。能々仏道を学べし。釈尊成道の大意をしたらば、何のうたがひか有ん。

30 一、惣じてつれかくをよむに立所あり。信といふ、ひとつなり。此信は、まことよむ。此信といふ字をよみおほするが専要なり。誠といふは、そなへておそるゝ事なり。道教にも儒道にも、天命と云をたて所とせよ。仏道には仏菩薩僧なり。神道は神の罰なり。仏神天命をおそれぬ者は、道にたよりなし。仏神天命おそれずして何として親と君とおそれなん。親と君とにおろそかにして、何として道を聞かんや。されば只その誠を見出す様にたとへをとり、事を添ても仏神天命の誠を教へ、親に孝をし、君に忠をし、友に信あり、夫婦兄弟の交り能、五常をみだらぬ様に誠を打出す様によむべし。

- 31 一、一国をしろしめす大人にても、一郷を治る人にもあまねくしらしめ度は、「心なしと見ゆる者も」と有段と、「顔回は志、労を施さじ」と有段をば云聞せ度事なり。人として仁と慈悲のなきは、犬には劣れり。殊更一部の大綱は家職をばげむに極まれり。「人、恒の産なきは、恒の心なし」とあるにて心得べし。「人間の大事は三つには過ず」とて、衣食住の意をあげられし。此衣食住は天子・諸侯・太夫より士農工商の体民、琴基書画の用民まで分に応じて家職をばげみ、たすけあふて社、世間はたつ物を、其源は家業に極まれり。何の人も家職を励むべしと云分べし。
- 32 一、若き人に読べくは、「ますほの薄」の段、「若き時は血気内にあまり」、「能をつかんとする人」、「七友」の段。
- 33 一、大人などの上には、「古の聖の御代」、「元龍の悔」。
- 34 一、身にたかぶり奢れるには、「松下の禅尼」、「小土器に味噌の附たる」、「人はおのれをつまやか」、「唐櫃」。
- 35 一、機の働かぬには、「東寺の門の雨やどり」。
- 36 一、誰にも読聞せ度は、「人ごとに我身にうとき」。
- 37 一、気をつかぬ人に、「雪の面白ふ」、「岩清水詣での僧」。
- 38 一、詞の品は、「久しく隔り」、「人の語り出たる」、「資季大納言」、「くすしあつしげ」、「又五郎男」、「世の人あいあふ」、「人の物を問たる」。かやうの品々、心を附べし。
- 39 一、片心なるには、「後徳大寺の大臣」、「きりくみの僧正」。
- 40 一、外智の過てまことすくなきには、「達人」の段、よみやう有。「くさめく」、「かもの岩本」、「ありす川の車」。

- 41 一、疎想なるには、「あしがなへ」、「強盗法印」、「乙靄丸」。
- 42 一、きれはなき人には、「ぼろく」の段よし。
- 43 一、一言芳礼をよくよまんに、得益多かるべし。
- 44 一、人に信をすゝむるには、「人の心すなをならねば」。
- 45 一、心のとりよりになるべき段は、「名をきくより」、「人の終焉」、「けふは其事を」、「くらき人の」、「世に語り伝ふる事」、「赤舌日」、「牛をうる者」、「双六の上手」、「ばくちの負」。
- 46 一、臣たる人は、「為兼大納言」。子たる人は、「諒闇の年」の段をよく得心あるべき也。
- 47 一、芸有人には、「道にたづさはる」、「万の道の事」。
- 48 一、愚癡なるには、「小野道風」、「ねこまた」、「丹波出雲」。
- 49 一、老たる人には、「あだし野」の段、「高倉の院の法華堂」、「年五十になるまで」。
- 50 一、好色の深き人には、「久米の仙人」、「女のもの云掛たる」、「しふの浦」、「妻といふこそ」。
- 51 一、心かたくすゝみたる人には、「あれたる宿の」、「万にいみじくとも」、「夜に入て物のはへなし」、「よろづの事はたのむべからず」。
- 52 一、上戸には、「下部に酒のまする」、酒のいましめ。
- 53 一、下戸には、酒のゆるし、「げこならぬこそ」。是は上戸を見くだする意を破さん為なり。げこはよしと心得べし。
- 54 一、欲深き人には、「ある大福長者」、「雪仏」。
- 55 一、女には、「女の物云掛たる」に、番君の四相を添たるよし。

56 一、財のおほき人に、「人はおのれ」^(二四〇)、「身死して財のこる」。

57 一、学問する人、「ある人の子、見さまなど」^(二四一)、「寺院の号」。

58 一、如此に機によりて読段々かぞへがたし。大概かくのしだひにて知べし。扱つれぐの意気といふ物をしりて、志を立んとならば、

「風も吹あへず」^(二四二)、「只空の名残のみぞ」^(二四三)、「物は不具なるこそよけれ」^(二四四)、「花はさかり」の段、「此木なからましかばと覚しか」など有所々にて知べし。此心を得せば、つれぐ学する人成べし。

59 一、「しづかにおもへば」などよみ、「人のなきあとばかり」など有所々をよみても心に何ともおもはず、気のうごかぬ人ならば、道に入がたかるべし。さりとて感涙はうかぶまじ。哀れなる所にてなみだぐまぬは、たのもしからず。

60 一、童の母をたのむ如きの人には、念仏題目立義にしたがつて、しめすべし。「法念上人念仏」の段、「是法法師」の段、「六根浄」の段、「筆をとれば物かゝれ」など、道に入べし。たゞ経力呪力の功德をすゝむべし。

61 一、先の機を誉て道に人人有。そしりて道に人人あり。縦ば若き人など道にいれんとらば、「あれたる宿の人めなき」^(二四五)、「万にいみじくとも」など有段を、さも面白くよめば、取寄ものなり。扱実義を云たる、よし。ほむるやう、そしるやう、色々の手段有べし。心に我執慢心ある人は、誉れば道に入物なり。やはらか成人には、はきとそしりて機を立させて引入様も有也。

62 一、大かたそこねまじき人と見るならば、「大事をおもひ立ん」と有段、「明日は遠き国」とある段を強々と読ば、勇猛精進になり

て、ねぬにめさます心地付人も有べし。此段ぐなどはよみにくき段なり。

63 一、実義徹して外智をきらふ人には、「土おほね」の段、「清水参りのうば」^(二四六)、「阿字本不生」などよみて、真言の実をしらしめば、即座にうつるべし。

64 一、愚癡深く文字至極と思ふ者には、禅家の放下、着機を奪ふ手段を所によりてよむべし。

65 一、歌をすくべし。つれぐ一部の慰は、歌に極れり。「和歌こそ面白き物なれ」とあり。又詩を心掛べし。なまじひの仏学・儒学せんよりは、はるかまし也。文旨ならずは、無点の書もよめ、文もかゝるれば、「まことしき文の道、作文」とあるに通ず。「文選」の卷々、白氏文集」など見よとあり。「自讚」の段に、「陽唐の韻」を尋しといふ事もあり。何れ詩歌にたづさわる人は、こゝろやさがたにして、道に便りあり。詩歌を好ぬ人には、四季の段、「万の事は月見るに」^(二四七)、「花はさかりに」などある大意は済まじき也。

66 一、兼好以前、儒学・仏学・歌学・神道に名を得し人は数多けれど、つれぐ草の様な意気と、三教一致と見たてし人と、老子の道をもてなされれし人は、おそらく兼好より外、伝へて承らず。されば、つれぐぐさを弁む人は、儒者と云も不好、仏者と呼るゝも不望、おのづから道者の風に成べし。なまじひに老子経・莊子など見そこなはんは、異風になるべし。兼好の様に、儒と仏とを両方に立、世間出世をあらはし、その挨拶に道を入れて、儒にも偏に行ず、仏にもゆかずして、儒も仏もともに和に立は、道教故な

り。されば一部は、多くは外智をいましむる段々なり。徒然を字
人、道教をうかゞはずば、外智多して本意にそむけなん。^(三三八)
利」の段、「物にあらそはず」、^(三三九)「すべて人は無智無能」など、
れし段、さりともおとなしき段也。世の人、儒になづみ仏にと、
こほりて、無繩自縛するは、道教を知らぬ故なり。

67 一、「齋王の野宮」とある段、能々神道の専要也。心を付て見るべ
し。此一段さへよく通りなば、唯一の大意に何の不足か有ん。よ
く至ん人、稀なるべし。

68 一、何の心もなくして聞より氣のつく段。「山寺にかきこもりて」、
^(三六)「久しく音づれぬ頃」、^(三六)「神仏にも人のまふでぬ」、^(三七)「御国ゆづり」、
^(四一)「加茂のくらべ馬」、^(四九)「高名の木のぼり」。

69 一、感情の発るおもしろき段。「飛鳥川の溯瀬」、^(四四)「あやしの竹のあ
み戸」、^(四七)「神無月の比くるすの」。

70 一、はしと氣のつく段。「世に順ん人」、「寸陰おしむ人なし」、「望
月のまどかなる」、か様の段をよむに、いねむり、あくびする人
は業人なり。評するにたらず。

71 一、世間にもよくかなひし段。初段、「さしたる事無て」、^(五〇)「万
のとがあらじと」、^(五三)「世にかたり伝ふる」、^(五七)「朝夕隔なく」。

72 一、禅宗のまつたゞ中を書しは、「光親卿の最勝講」なり。又、「と
こしなへに違順」の中に、「三つに味」とあり。かよふの文字に
心あり。又、「直に万事を放下して」とある、心を付べし。

73 一、何事にもわたりて要にたつべきは、「貝をおはふ人」、^(五二)「或人弓
射る」などの段なり。

74 一、雑念雑をかたくいましめたる段あり。「いやしげなる物」と有
段也。よく味ふべし。

75 一、道念を急にすゝめし段多き中に、「老来たりて」の段なり。一
手ありておもしろきは、「あだしの」ゝ段なり。

76 一、「我身のやん事なからん」の段、儒にてさばく事しにくき段な
り。「諒闇」などの段は、そよみにする程よし。

77 一、来意といふ物を定て、さきの段より次へかよはしくせね
ば働かぬる。

78 一、幾人聞人あらん共、さきの人にはおもふべからず。只、我ひと
り丈に成きりて、一ぱひによむべし。一ぱひと云事、修行せねば
ならぬ事なり。但、聞人の機うばふてよむべし。然らざれば心に
うつらぬもの也。手もなき所に深理をつくるも習也。

79 一、何のわけもなき段あり。是わざとうめ草に書たる物なり。すた
れたる所なきは、取所うすき物なるゆへなり。夫を捨てゝせず
よむが、よみ人の手柄也。

80 一、つれづれ一部の詞を空に覚ゆる程ならずんば、要にたちがたか
るべし。覚ゆるは、志さゑあらばいと安き事なるべし。只すきて
常によむべし。味の外の味、出来ぬべし。

81 一、つれづれよみくせの事。いかに定りたるよみくせなりとも、大
政大臣を、だじやう大臣などよむは聞悪く也。かやうの了簡有べ
き事なり。扱は一字にても声によみ、よみによみて、各別心持ち
がふ事有。能々そよみ専一とすべし。清濁にて学のたけも知るゝ
物なり。歌学が専要なり。

82 一、素読は、おちつけて静によむ也。心持は、幽玄は声和らにおもしろく、のどかによむ也。源氏・伊勢物語の類ひによみなす。幽玄の中に哀傷有。「風もふきあへず」、「人のなき跡ばかり」杯の類ひ也。いかにも哀によむべし。因縁の所は只、常々すらくとよむべし。保元・平治・盛衰記などよむたぐひなり。事を沢山にはりつめてよめば、学のたけあらはにして聞能也。有職の所は職原・禁秘抄の類なれば、落つけてはきと読べし。事すくなく埒明て、そこを慥にしらぬ様によみなすべし。儒道にては四書五經の講釈の如く、神道は殊勝を本として、道教はをとなしくよみなすべし。殊には仏道の所は声・言葉強々と、談儀をとく様に、はへてよむべし。中にも道念の所は我をわすれて責詰て可読也。

83 一、講釈する時、府中に心を付るといふ事あり。抑揚の挨拶也。是をよく心得べし。扱いふ詞遣ひをいやしく耳にたつ様なる事云まじき也。但、府中しんになりて眠きざす程ならば、とつと目を覚す事は有べし。是、狂言なり。たまさかの事なり。たとへをとる習あり。くわしくするされず。さて一座の読しまひに、はきとしたる高上の道理をさばくが能也。さある時は次々の座、しむ物也。此組合のつもり有べき也。扱、詞くどからず聞ゆる様によむべし。

84 一、講釈はなりにくき物也。さらりとよめば、古伝の抄を見たるにおとれり。委しく読ば、くどくし。扱いかにとならば、先一段の大意を一筋に紛れぬ様に胸に吞込て、其筋壱つをよむべし。夫に所々了簡をかへて、少々古伝をひき、たゞ向上の一路におとな

しくよめば、手あつき人は向上より入、学解分際の人古伝了簡にとりより、下愚の人は筋一すじに入。是を以一人くによく通るなり。一人に對してよむ時も、先の機を見て此上中下をもつて読べし。とかく先の機に應ぜざれば聞得る事難し。しからば道の本意もすたれなん。殊更宗門の勝劣をかたぐ沙汰すべからず。

85 一、講釈するに失あり。よむ時は我になりきてよめども、よみしまひて、もとのそれがしになる事ならぬ物なり。読時こそ老子・孔子・釈伽の内証にもならんずれ、よみ終りぬればもとの凡夫也。其意地を弁ぬ故なり。去に依て、よむ時、府中の人にそやされ、信仰せられて、夫を凡夫心より実我ととり寄故に、慢心出来て人柄そこぬる人多し。府中の人は正直也。道を聞て其主を信仰する事、真実也。相かまへて、読人ほこり慢心する事なかれ。中にもつれかよまん人、常の心遣ひが専要也。己誤りて人ををしゑん事、本意に背けり。

86 一、読府中よむに人を撰は、悪敷事也。撰は前の事也。つらなる上は、おとれるをすくひて、互に此道に引入べき也。人を見下事なかれと也。

87 一、講時、詩歌を余り引べからず。其故は、詩を釈し歌をさばく時に、座中の人々詩歌を覚、書付んとするにより、其一段の筋まざる物なり。されども詩歌を引ずして叶はぬ所有。又おもひもよらぬ所によく叶ひたる歌など引ば、はきと受るものなり。歌は講尺の花なり。其外、故事因縁を引過べからず。是又一段の筋となへ失ふべき物なり。只理を責て詰て言べき也。理の味ひを能のま

せて無味におとする、講尺の上手なり。

88 一、大人の御前にてよむ時は、心得様あまたあるべし。いよく物のそこねぬ様に、言葉少く、はきと心を付べし。但し、なずみおそるゝ事なかれ。

89 一、みんぎんにあひさつしてよむべき人、三国の天子・親王・関白・世尊・諸仏菩薩・聖人・公方・内大臣以上の公卿也。其次に読べきは、賢人・大名・大納言以下の公卿、諸寺の僧綱など也。大方にいふべし。夫より下は礼法なし。とかく人をおし下て云はあしく、上にのせたる歴々をば、何と遊されて、何と被成てとよむべし。中段にあるは、何と被致て、何とめされてとあるべし。夫より下は、聞にくからぬ様に云べき也。

90 一、よむ内に古伝の抄をそしる事なかれ。兎角余所をそしるは聞にくき事也。又手の内になぎりたるやうにしてよむも一ツの手段なり。さりながら、おゝくは謙退の言葉よきなり。

91 一、歌をよみかけ、段の品をつくる所は、自然にことはゆる様に調子を下てよみかくべし。惣別、段のよみはじめとよみをさめとを調子ひくふ閑に、初終りおなじ様によむが習也。調子は上に明す所の幽玄・因縁・諸道に依て、めり・かりけにあり。

92 一、畢竟は徒然（マユ）のよみやう、常に神道・儒道・道書・仏法の八宗兼学、詩歌の道に達し、有職・因縁をわきまへ、扱は世上の喜慶苦楽、狂言綺語までも、あまさずもらさず、つれづれの修行として、心に向上の一路を忘れずつねに心がけ、扱読時は、只つれづれの一筋斗に急度眼をつけて、詞にも意にもなづまぬ時は、

所々に出て能品々、無量の事ども胸に時々に出るもの也。夫をおつとり合、座につきて、よき様はからひよむが至極也。常に此事は爰に引、此段にかやうによむべしと胸に貯て座に附て、各別ちがふ物也。とかく胸中に道具を持では、講尺は働かぬ物也。只、一段のすじ一筋の違はぬ様によむべし。意と詞になづみなば、講尺はたらくべからず。能々よみにくき物哉。

93 一、終の段、法花経に約してよみたるがよし。題号の草紙は、止観（四三）にて読たるがよし。とかくの難門有べ（マ）からず。兼好は天台宗なればなり。

94 一、種々の品を定めて読様をみちびくに深き心あり。夫、人界のおもひ出は諸悪莫作・修善奉行に越る事なし。されども人々機々にしてすき好む事ひとしからず。此草紙は夫によく叶ひし故に、若きより年よるまでも捨ずして、人を道に引入るゝに又と類なき物也。誠に仏の教、聖の言葉にも越たり。教外別伝・不立文字、猶また理致、機関、向上のおしへあり。況や其外をや。されば、つれづれと云草紙を中人にして、まことの道に引入ん為の方便なり。然る上は、専らする所は衆中の意に道の移る事ばかりなり。能をするにも樂を奏するにも、その事計り、調子が添ねば人の心をほどこ事かたし。感にた多ておもしろきとおもふ、これ真実のそこより本分の我を見附出せし所はならずや。去によりて下手は時をしらず、調子をしらぬゆゑに、おもしろからず。上手は感を催し、座をしり調子をしる故に面白し。意にのるとのらぬとの差別也。おなじつれづれをよむにも、かよふに吟味してよむ時は、座中お

もしろく意にのりて、すける道より誠の心地にも至りなんぞかし。つれぐと有所は根本智、本覚なり。一部の品々は差別智、始覚なり。されば此二法を以、道をさばくに不足なし。つれぐは寂然不動の極地、誠に生死の根源、諸法の本地なり。爰におゐてさそふべきの元もなく、天地が打かへるとも驚くべき所もなし。こゝの心地は儒の明德、道の無為、神道の清浄ならずや。此上に浮ぶ所の念有。此念を心をつけずして一生あやまるを凡夫、衆生、不浄の意とす。是則、儒の私欲、道の外智、神道の穢れ也。仏道にいわゆる忘念なり。爰におひてあらたに道を聞て、儒を好む人の心には根本は堯舜、周礼一姓の此身なれども、あやまつて私欲出来て、聖者をへだてたるとくやしくて、聖人の心を学て忠孝五常をよく行て、七情みだりにおかさぬ様子にと心を附るが道念也。道を好む人は、誠に三皇老子も此身も、無為の大道に隔はなき物と外智発してほこるまゝ、さにほこり我無に我を立、人情に落ぬるこそ口おしけれど、深く無為をこゝろさず。是、則道念也。神道を志す人は、其むかし国常立、又天照大神宮、此身も隔てなきを邪曲の意ゆへきよきこゝろを失ひ、今かよふにけがれたりとかなしみ、正直の風に帰し、けがれたる心を清くするは道念也。仏道にもとより実相露妄とたてて沙汰し、仏衆生とし、迷悟とあるも、皆道念と心をつけよとの為也。道念をば機と一つにても心得たるがよし。機とは、心気意情、鬼神魂魄の惣名なり。此機といふ物をつよくおしたてて、つかふべし。さればつれぐ一部の事々を、あなた多通し、こなた多通し、つかひ応ずる道念修行、

機のつかひ様と云物なり。されば此こゝろといふ物は、何とあるやらんしらね共、本心はつれぐの寂然不動、本覚などをし定め、意心のつかひ様は道念として、機をはきと立て自由につかひ働かするにしくはなし。本心はおもき事、天子公方の如し。是つれぐなり。機はつかはるゝ事、万紙の如く、其用に応ず。是つれぐ一部品々なり。されば、つれぐとうごかぬは万法の惣体也。機に油断なきは、万法に取て働かする故也。本心はしづかに機は働く、是に何の不足あらん。されども道念とたてざれば、修行おそし。夫に依て、急に無常をすゝめ、ちやく地に仏祖・聖賢の宝義を悟らしめん為の道念なり。内につれぐと本心を見、外に実相の境をつれぐとせよ、宿執開發の時節まのあたりならん。本覚・始覚を得心せば、至る国土もなく、とゞまるべき娑婆もあるまじ。往来常住なり。此道念を念仏とも又題目とも名附る也。守護の仏菩薩も是なり。されば一部の品々は雑乱なれども、道念に帰し、つれぐの題号に尋れば、只一路の直道なり。悉く記にいとまあらず。

此一巻は、嘯露軒上野重山入道、一洞翁一器子の伝をうけて秘藏ありしを、元禄十あまり五とせ、みづのへむまのとし、初冬の比ほひ、予ひたすらになげきて志しをまめやかにして、是を免許せられて写し侍り畢。

霧窓齋是誰子広法

(かわひら としふみ・熊本県立大学助教授)